

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (72)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

今回も図絵(pictures)や物質(things)は用いない Trump 大統領の英語(English 'without' using pictures or things)を text 単位で見てみる。(1)は彼が大統領就任 2 年半を経た 2019 年 9 月 11 日の時点での大統領選世論調査に関するもの、(2)は同じ月日の同時多発テロ事件の追悼、(3)は 2018 年 3 月の時点での貿易赤字に関するものでスペイン語翻訳版と対照もする。同時に「外国語としての英語修得論」(theory of learning English as a second language)をさらに思索したい。意味の **sense value** (意味価) のみならず **feeling value** (情緒価) [cf. True^S と True^E : Ogden-Richards, *The Meaning of Meaning*, p.241] の重要性 [本連載(32), 前回(71)など参照] を鑑みて、今回も便宜的に各々末尾に顔記号 emoticon も付しておく。

(1) If it weren't for the never ending Fake News about me, and with all that I have done (more than any other President in the first 2 1/2 years !), I would be leading the "Partners" of the LameStream Media () 20 points. Sorry, but true ! 😞 (September 11, 2019)

▲2020 年大統領選の前年の秋 (9 月 11 日) の時点で出た候補者の世論調査に関し Trump 大統領は「私に関して終わりのなき偽メディアの報道がなければ、私はどの大統領より多くを最初の 2 年半で成し遂げた功績があるのだから、やぼったいメディアの「仲間たち」(民主党員)の大統領候補者を 20 ポイントはリードしているはずだ!」と言った。

太線の LameStream での stream (流れ) はプラス α Basic 語でイタリック体の *stream* としておく。下線の lame は「足の不自由な」が元の意味であるが、文脈からも 1 行目の the never ending Fake News を換言したものとみればよい。lamestream は mainstream (主流・本流) をもじった言い方で、「やぼったいメディア」ぐらいに考えてよい。「マスコミ」ならぬ「マスゴミ」と言う人もある。

stream[stri:m]の[rí:m]の音声に「流れること」の意味が感じられる。他のプラス α Basic 語にギリシャ系の *rheumatism* (リューマチ) が同系語としてある (*rheumatism* は Basic での国際語彙 101 語中の 1 語)。前回言ったが EP 本の背景となった J. A. Comenius 著 *Orbis Pictus*『世界図絵』をもじった「世界語彙」たる Basic 語本体 850 語中では、やはりギリシャ系の **rhythm** も同系である。非世界語彙では rhyme (韻・韻を踏む) なども同系 [他の例は拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(25)参照]。なお、「世界語彙」の英訳としては Richards-Gibson が *Techniques in Language Control* (1974)で Basic を 'Every Man's English' と称したので、もじれば 'The 850+Every Man's Words of English' とも言えよう。

なお、本会で Basic に関し注目され始めたのが事実上は 1990 年代初頭の文京区本郷での会合であった。それ以来 30 数年間、今日まで変わりはなく同じ grade のものとなっているが、もう年数からしても何かとこの grade からは脱したい。意識変革である。今回まずは次に試問の形で考えてみる。

試問 上の tweet text 文(1)に関する試問で、この程度の単に語彙・文レベルのものは Basic 英語検定試験 (Test of a Working Knowledge of Basic English : TWK-BE) 「仮称」なら grade は初級レベルということになる。

1) 文中の下線部 If it weren't for をさらに Basic の範囲内で言い換えるとして、それぞれ(a)~(d)の空所に入る 1 語は何か? [いずれも英語でよく用いる言い方である]。

- (a) () it () () (b) If () ()
(c) () () (d) ()

2) 文中の lame に関連し、英語で「役立たなくなった人や物」のことを lame duck (不具のアヒル) と慣用的に言うが、duck (アヒル) を Basic 世界語彙で言えば?

3) 文中の空所に「20 ポイント分」の意味になる空間詞を入れたい。次のうちどれか?

by, for, in, on

4) 貿易に関連し、次のそれぞれ括弧の中の文字で始まる Basic 世界語彙中の語は?

「ドル高円安」: The dollar is (s) (a) the yen.

.....

正解	1) (a) <u>Were it not for</u>	(b) If <u>not for</u>	(c) But for	(d) Without	2) fowl	3) by
	4) strong, against					

<備考> 1) の(a) If を省略し、倒置とする強調の言い方。(b) it were を省略した言い方。(c), (d) もよく用いられる。2) lame duck (不具のアヒル) の duck は Basic 世界語彙なら fowl となる。3) by の原義は「近くに置いてみること」[同上拙著、第二部、例(116)参照]。4) 重要な空間詞 against が EP 本では導入されない不可解さを本連載でたびたび言ったが、その後 III の p.190, p.192 で忽然と見ることになるのに気づいた。against は III の p.190 の脚注にも巻末索引にも示されないのは不可解で見落としミスであろう。

文中 2～3 行目の I would be leading the “Partners” of the LameStream Media by 20 points. では本連載で示唆している逆さ読み(reverse reading)で lead ... by 20 points 「～を 20 ポイント先んずる」の言い方を内在化するとよい。末尾から順に by 20 points → the LameStream Media → the LameStream Media by 20 points → would be leading → would be leading the LameStream Media by 20 points → I ⇒ I would be leading the LameStream Media by 20 points. の pattern practice で根付く[こういう逆さ読みを筆者は ‘mirror-image reading’ (鏡映読み) とも呼んでいる]。この 1 文は MSOE スクリーン上では $\phi \cdot N_1 \cdot V \cdot N_2 \cdot ADV$ から来る文層の浅い STR 1 の基本 pattern である。

(2) Today and every day, we pledge to honor our history, to treasure our liberty, to uplift our communities, to live up to our values, to prove worthy of our heroes, and above all, to NEVER FORGET. #Honor911 😊 (September 11, 2019)

▲1 文でも単発的でない text 文である。一瞬何のことかと思われるかもしれないが、末尾の #Honor911 で分かる。2001 年 9 月 11 日に米国で起きた同時多発テロに関わる。上の(1)と同じ日の tweet であった。

「本日、またいつの日も、われわれは誓いを新たにす、歴史を尊重し、自由を重んじ、地域社会の向上を願い、価値観に従って生き、亡き人々の英霊を敬う、そして何にもまして決してこの日を忘れるはしない」(#911 を記念して)、という内容である。

文中で we pledge to ..., to ..., to ... と 6 つの to が用いられるが、これが文の最後まで延びていく意味ベクトルとしての核になる語である。太線とした pledge (誓う) にあまりこだわる必要はない。

本連載では、世界について語る Basic 世界語彙本体 850 語およびプラス α Basic 世界語彙をよりどころにすればほぼどんな語の意味も理解できるはずとしているわけであるが、pledge の意味をこの全人類のための世界語彙(Every Man’s Words / Every Man’s Words of English / English Words for Everyone)に求めれば何があるか？実は本連載(64)で特別に注目した **play** が同系の世界語彙としてある。play を「振舞うこと、受け入れて行動すること」という語感で把握するとよい。非世界語彙の英語語彙に plight (誓う) があるが同系である。印欧祖語の語根音素形 PIE etymon は/DLEGH/とされていて-gh-は納得できる。

/D/が不可解だろうか？PIE etymon の初頭音素/D/からの[d]音をもつ同系語に indulge [< (in + dulge)] (～にふける・～に没頭する) がある。play と共通な意味も合わせて感じられよう。

太線語 liberty (自由) は本連載(40)の(1)、(47)の(2)、(63)の(3)で見たので確認である。世界語彙 **love**, **lift**, **level**, **belief**、プラス α 世界語彙 **lever**, **delivery**、また非世界語彙 elevator, relief, loft などと同系で「心が浮き、安定すること」が原義である[さらには拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(71)参照]。

(1)も(2)も同じ 9 月 11 日の tweets である。ところで本連載(68)の(1)で Worst Mornings of the 21st Century: 9/11 & 11/9 「21 世紀の最悪の朝: 9 月 11 日 (2001 年) と 11 月 9 日 (2016 年)」という返信 tweet を扱ったが、Trump 氏は 2016 年 11 月 9 日の朝は前日の大統領選対抗馬の Clinton 国務長官 (当時) に勝利したことが確定した時であった。

曰く、“Thank you very much, everybody. I’ve just received a call from Secretary Clinton. She congratulated us, it’s about us, on our victory.” 😊 (November 9, 2016)

すなわち、この日の朝 Clinton 氏は敗北を認め Trump 氏に祝福の電話をしたわけである。同時に皮肉にもこの宣言の瞬間が、米国大統領選挙でのロシア介入疑惑の始まる序曲ともなった。

[以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01-05)より — 2 言語対照]

(3) When a country Taxes our products coming in at, say 50%, and we Tax the same product coming into our country at ZERO, not fair or smart. We will soon be starting RECIPROCAL TAXES so that we will charge the same thing as they charge us. \$ 800 Billion Trade Deficit — have no choice! 😊 (March 2, 2018)

cf. Cuando un país grava nuestros productos con un 50% y nosotros gravamos el mismo producto que llega a nuestro país en CERO, no es justo ni inteligente. Pronto comenzaremos con IMPUESTOS RECÍPROCOS y cobraremos lo mismo que nos cobran.

¡Déficit de \$ 800K millones, no hay opción ! (2 de marzo, 2018)

▲1 行目の動詞 Tax の T の大文字書きには驚く。語強勢はまるで任意で確固としたものはほとんどない〔本連載前々回(70)・前回(71)で触れたドイツ語にならった英語での全名詞の語頭の大文字化の構想参照〕。

「米国からの品に仮に 50%の税を課し、米国への品には無税など、そんなことはフェアでなく賢明ではない、やがては同等課税とする、8 千億ドルの貿易赤字だ、選択の余地はない!」。明快な内容である。

太線語 reciprocal (見返りの) は re- = back から文脈推理できる。

太線語 charge (金額を課す・請求する) はプラスα世界語彙であり charge とイタリック体としておくが、世界語彙 **cart, carriage**、非世界語彙 car, carry, carpenter, career などと同系である。元々は道具としての「荷車」のことで、印欧祖語の語根音素形(PIE etymon)は/KERS/ (VCHAR/)とされ原義が「荷を負うこと」である。carpenter (大工) は元来が荷車を作る人、career (経歴) は荷車の通る路(みち)のことが人生の路の意味にもなった〔同上拙著、第二部、例(18)参照〕。なお、荷車といったが「三輪車」は英語で? 自転車を bicycle と言えても三輪車が言えないと幼児とも話ができないことになる。三輪車は tricycle であるが Basic 世界語彙でなら three-(w)と言えよ。括弧に入る w で始まる1語では何? instrument noun (道具名詞) の wheel からの wheeler でよい〔世界語彙 wheel は次頁でも見る〕。

太線語で世界語彙 **same** の root sense (原義) は「穀物の種(タネ)が同種であること」。**simple, system** などが同系語である。seminar (セミナー) なども同系で、seminar とは「種(タネ)をまく場のこと」。なお、**different** は{dif (= away) + fer (= to move) + ent}で「引き離すこと」が原義〔同上拙著、第二部、例(50), (66)参照〕。Same or different? は A = B か A ≠ B かの論法と結びつくが本連載での背景でテーマとしている観点からも、また語釈の一端としてもさらに突っ込みを入れるべくポイントの1つと言える。

太線語 deficit (損失・赤字) は本連載(46)の(1)で扱ったが[de + ficit (= to make, do)]で、世界語彙 **fact, effect, office** など、また他に多くの同系語が英語にある〔同上拙著、第二部、例(27)参照〕。

太線語 choice (選択) は元来が「食べ物を賞味すること」の意味であったことは特記しておこう。

下線部の not fair or smart (フェアでもないし賢明でもない) はこの文の主節部であり **It is not fair or smart when a country ...** が正式であるが、くだけた略式ではこうも言える。

cf. のスペイン語の productos, cero, justo, inteligente, comenzamos (<comenzar), recíprocos, déficit, millones, opción が、英語の product, zero, just, intelligent, commence, reciprocal, deficit, millions, option と同系である(下線は Basic 世界語彙の範疇語)。

ところで本連載(68)で意味(meaning)の問題追究には思想史の流れの中での把握が必要とし古代ギリシャの3哲人ソクラテス(Socrates)、プラトン(Plato)、アリストテレス(Aristotle)に関し言及したが、特にアリストテレス風の事物の ontological (存在論的) な見方を示した。以下で「意味の意味」を説く Ogden, C. K. - Richards, I. A. (1923) と事実上同じ貨幣の両面で表裏一体となる「無意味の意味」を論じる Blocker, G. (1974) のアリストテレス風の見方に改めて照準したい。まずは Ogden-Richards が意味を 16 種に分類し 6 番目として次のように言う箇所に注目したい〔下線は筆者〕。

Meaning is — (VI) An activity Projected into an object. — Ogden-Richards, Chap IX (p.186)

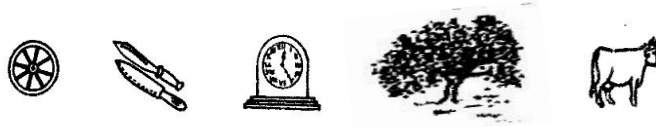
すなわち、意味とは「対象に投射される一活動である」というのであるが、ここでの Projected に特別に注目したい。射影・投影を意味するプラスα世界語彙 **projection** こそが、Ogden-Richards を裏返す形で意味の問題を説く G. Blocker が首尾一貫して用いるキーワードとなる。彼は世界の事物の在り方・存在(existence)をオーストリア出身で英国の L. Wittgenstein (L. ヴィトゲンシュタイン) [1889-1951] やドイツの M. Heidegger (M. ハイデッガー) [1889-1976] 寄りで論旨を展開する。Ogden-Richards の次の例もアリストテレス風の見方と重なる〔中略・下線は筆者〕。

... if meaning is substituted for the 'intention' or 'purpose' of such a will ..., then the meaning of anything will be its purpose ... — Ogden-Richards, *the Meaning of Meaning*, *ibid.* (p.196)

すなわち、もし意味が「意図」または「目的」の置き換えなら、どんな意味も purpose (目的) となると言っている。まさにこれは本連載(68)で触れた Aristotle's theory of the 'four causes' (アリストテレスの「四原因論」) の4つ目の原因素である目的因(final cause)となり、哲学としての目的論(teleology)と結びつこう。このあたりはやはり本連載(同 68)で扱った Richards, I. A. & Gibson, C. (1974) *Techniques in Language Control* (p.137) で意味の中核を目的(purpose)とする論考とも重なる。重要なポイントである。

さらに関連し本連載(同 68)で見た EP 本 III からの次の文例を再度引用する。今回ここでは文例と共に wheel / knife / clock / apple tree / cow の5図画も付しておく〔下線は筆者〕。

Everything, said Aristotle, has its own true work — or purpose — the work it can do best, the work which is right for it. — EP III (p.227)〔本連載(68)も合わせて参照〕



(EP III, p.227)

すなわち、事物の存在が Aristotle (アリストテレス) の目的因(final cause)の視座から示唆されるこのあたりは Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (1923)での論考が EP 本 III に投影・射影された例だと見たい。上の最初の図画の車輪(wheel)は動力となるが、wheel, knife, clock, apple tree, cow 各々 そのように命名(naming)される物質の図画から「四原因」における<質料因>、<形相因>、<作用因>、<目的因>が何かをじっくり考えてみるのである。本連載(64)で確認したが、EP 本 III の巻末頁で提示される文 ..., and language is the most important of all our instruments for this purpose. (p.233)での末尾語は purpose (目的)であり、聖書思想(biblical thought)・ギリシャ哲学(Greek philosophy)を背景とする記号論・意味論のプレ入門 EP 本では III の巻末がこの文とともに締めくくりとなる点もポイントだろう。

この世界には様々な purposes (目的) のための instruments (道具) がある。道具は一般に手を用いる。たとえば髪を切る「バリカン」(と命名されたもの)は英語なら手(hand)の親指(thumb)と指(fingers)を使う昔の hair clippers、世界語彙でならいつの時代も hair cutter となる。「バリカン」はフランスの会社名に由来する。人間は日常的に道具としての「鏡」(looking-glass)を用いるが、鏡なしの日常は考えにくい。

上の図絵の wheel ならその目的は for (the purpose of) moving things away、以下順に for cutting things out, for measuring time, for getting apples, for getting milk のようになる。EP 本 I, p.97 で初出となる目的の for の視点からは「寒暖計」なら This is an instrument for measuring heat.で、<for + V-ing>がポイントである。V-ing の中身でこの世の在り方も見えてくる。本連載(69)で提示した深層英文 pattern としての<We Do Things With X (for certain purposes).> [X: 道具] も想起したい〔道具名詞(instrument noun)と格(case)としての具格(instrumental case)〕についての言及は本連載同(69)参照〕。

なお、元来が独習用である EP 本であるが、本会が“英語を英語で実践”と銘打つ限り III を「講読(reading)」として ‘English through English’ (Basic)で実践されてよい。代々継承されている古い手法からの脱却で総括されてよい EP 本実践上での課題だろう。本連載はそれを意識したものでもあるが、この実践ができれば上記 Basic 英語検定試験 (TWK-BE) [仮称] なら Basic 力の grade は上級レベルとなる。

さらに関連し、Blocker, G. (1974)から 2 例を次に示しておく〔破線による省略、下線は筆者〕。

- 1) ... if we are to explain things thoroughly, sufficiently, then we must employ final causes.
— Blocker, G. *The Meaning of Meaninglessness* (1974), Chap. 2 (p.51)
- 2) Aristotle's conception of essence contains important suggestions about the nature of projection and being-as, ... — Blocker, G., *ibid.* (p.56)

1)で目的論者(teleologist)アリストテレス風の目的因と、2)で「そうあるものとしての存在」(being-as)の本質が投射と射影であることを示唆している。具体例でたとえば衣服(dress)なら四原因(four causes)は①質料因(material cause)が布・革など、②形相因(formal cause)がデザイン(パターン)、③作用因(efficient cause)がミシン縫いなど、最後に④目的因(final cause)が部分⇒全体のワンピース(one-piece)などとなりファッション性としての存在と化す[EP 本なら II, pp.220-221 参照]。これもきわめて重要な点である〔なお、作用因は「変化」の原因素でもある〕。

さらに G. Blocker は言語で表現される意味に関し、上記 L. Wittgenstein が Don't ask for the meaning, ask for the use. 「(その) 意味を求めるのではなくその用法を求めよ」、また The meaning is the use. 「(その) 意味はその用法である」と言っている点を引き合いに出している〔前者の例は *The Meaning of Meaninglessness* p.4、後者の例は p.6〕。意味深であり要注目である。これは等値記号では A = B のレベルである (cf. MEANING MEANS MEANING. 「意味は意味を意味する(A = A)」[Ogden-Richards, p.171]。)

そもそもこのあたりの一連の見方は本連載(13), (14), (35), (42), (57), (70)で示唆した今日的な generative semantics (生成意味論) での、意味の世界を cause 関数で分析し事物の存在を示す Lexical Conceptual Structure (LCS: 語彙概念構造) の定式化 x CAUSE [y BE AT z] と結びつくことになるだろう。重要なポイントと言えよう。ここでの [y BE AT z] は [STATE y BE [LOC AT z]] を簡略化して表記した概念構造である〔下付け表記の STATE は状態(condition)、LOC は場(location / place)を示す〕。さらに文レベルでのいわゆる深層 pattern として改めてここで示しておくが [[x ACT-ON [[y CAUSE [BECOME [[y BE-AT-[ON/IN/WITH] [z]]]]]]] のようになり、<x が y に働きかけ、その結果 y は z の状態に変化する>の意味となる〔本連載での同上(13), (14), (35), (42), (57), (70)参照〕。

